

「旭川のユニバーサルデザインの現状と課題」 記 録 集

北海道東海大学芸術工学部 教授 小 河 幸 次

はじめに

旭川市におけるバリアフリーの提案は、関東の有名な建築家や学識経験者の講演、北欧や北米を視察旅行に行った経験、障害者団体の聞き取り調査などを基礎にして立案計画されています。しかし、高齢者と障害者（平成11年の旭川市身体障害者手帳の所持者は17,691人、9月の住民基本台帳上の人口は364,834人であり、市民の約21人に1人が身体に何らかの障害を持っていることになり、65才以上の障害者は55.3%を占め、半数以上が高齢者であることが特徴です。昭和61年の身体障害者手帳の所持者12,445人と比較すると、5,246人増加しています）のために作られたはずの買い物公園、デパートや公共施設で障害者を見る機会は街頭募金活動等以外は時々見かける程度です。

施設を利用するはずの障害者や高齢者が是非欲しいと言って作られた施設なのに、「移動が大変」「時間がない」「体調が悪い」「利用できない」等と理由を付けてしまい、年間利用回数は予定よりも極端に少ない。

現状から理解できることは、外国や雪のない地域の建物や製品のコピー、障害者の団体との意見交換会議等の程度では問題解決はできません。

私は、旭川市で普通に見られる問題を指摘し、その対策案はどうすればいいのかを個人・市民全体で考える一つの切り口にしたいと思います。

現 状

1 バスの問題

現 状

バスに乗ると混んでいても、混んでなくても入口付近で立つ傾向が見られる。（中高校生に多い傾向が見られる）そして、大声で話し、大きなスポーツバッグ、紙袋やカバンを通路に邪魔になるように置く。

席に座っても、足を開いて、二人分のスペースで座り、自分たちの仲間が来ると隙間を作り座る。おそら



写真 1



写真 2

く仲間以外の人間は、彼等、彼女等には旭川市民は透明人間に見えるらしい。

一般市民は、バス停でバスを待つときには、ばらばらの状態で待っている。バスが来ると、我先にと混雑する風景が駅前のバス停に普通に見られる。

郊外のバス停には、汚い待合室しかなく、寒い日は苦痛で、立って待つのが常識である。

（写真 1， 2）



写真 3



写真 6



写真 4



写真 5

2 買い物公園

現 状

歩道には、旗、バーゲン用のワゴン、椅子、テーブルが置いてある。

(点字ブロックが使えない状態である)

中高校生は道いっぱいに広がって歩く。ぶつかって

きても、無言、無表情の態度。

自転車は自由に通行し、好きな場所に止める。自動車も歩道に停車している。

スピーカーからは音声の高いコマーシャル放送が流れ、視覚障害者は歩行困難な状態である。

点字ブロックには障害物(自転車 写真3)(鉄の柱 写真4)があり、冬期間は(写真5)のように点字ブロックは使用できない状態になる。

冬はアイスバーン状態になり、買い物公園は世界で一番危険な歩行者専用道路に変化する？

3 デパート・スーパーマーケット

現 状

ドアを開くのが辛く、温度差のある季節には開閉が特に重くなり、危険である。

商品の陳列棚と置く位置(ディスプレイ)が悪く、車椅子の人には見えない。

通路が狭い。(特に食品売場)

各階案内用見取り図と文字位置が読みずらく見にくい。(色と文字)

値段が小さいために見にくい。(見せないようにしてある店もある)

玄関が全面ガラス張りのため、入り口がわからない。音声案内誘導機がない。

エレベーターの音声案内が設置されていない。

駐車場が遠く、障害者専用の位置に健常者が車を止めている。(写真6に停車している車はすべて健常者の車である)

段差が多い。

商品が取りにくい。

レジが混雑する。

4 レストラン

現状

建物はバリアフリーに対応しているが、テーブルの高さや、食器、フォーク、スプーンなどの小物に配慮がない。

解決方法はユニバーサルデザインコンセプト

ユニバーサルデザインはロナルド・メイス教授を中心に提唱され、特別な調整や加工をしなくても、全ての人が使いやすい製品、サービスや環境を提供するという理念に基づいています。「バリアフリー」が「既で存在している障壁を取り除く」という考え方なのに対して、ユニバーサルデザインは最初から「障壁」を感じさせないという点に重きをおいています。

(図2)

雪が降ると障害者は外出禁止、高齢者は健康維持のために凍結道路を自転車でふらつきながらの散歩や買い物の行動が数多く観察されたり、雪上で転倒して入院するのは、自分自身の問題であると理解している市民が多いと思います。冬まつり期間中に道外旅行者や高齢者が転倒事故を起こしても対策しないようでは観光客の増加は見込めない。駅周辺の活性化の基本は「足元の安全」、商店の数を多くする発想では期待できないと思います。

現在の旭川では、人間工学や生理学を取り入れた機能的街づくり(ユニバーサルデザインコンセプト)より、個人や地域で障害者(子供、障害児、妊婦、幼児を抱いた親、怪我・病後の人、高齢者、視覚障害者、聴覚障害者、言語障害者、肢体障害者、知的障害者、精神障害者、内蔵障害者、日本語が話せない外国人旅行者等)の個性や特徴を理解できる教養、知識、理解や興味を広げることで、除々に機能的な街づくり(冬

に高齢者や障害者がたくさん見られる優しい街)が必要だと実感すると考えています。

この理論が、旭川で通用するかどうかは解りませんが、超高齢社会となり、今よりもっと製品、サービスと使いやすさが求められ、ユニバーサルデザインコンセプト、バリアフリーデザインといった専用品開発と協調することで、理想的な寒冷地の高齢者・障害者社会に近づくことができると考えています。

結論と提案

超高齢化の旭川の街づくりを考える時、積雪寒冷地の障害者・高齢者の現状を再認識することが、最も重要だと考えています。21世紀に安心して暮らしやすい街を提案するには、健常者の子供、若者、障害児や若い障害者の意見を聞くこと、そして長期計画による旭川だけの学校教育の改革が必要だと考えています。

99年8月現在、旭川市内にある、盲学校全生徒数21名、聾学校全生徒数73名、養護学校全生徒数146名、合計240名の生徒がいます。健常者の生徒の減少傾向が見られることから、障害児が可能な限り普通の学校に通学できる環境が必要です。

幼稚園、小学校、中学校、高校、専門学校、短大、大学で、ごく当り前に障害児・障害者を理解しながら一緒に勉強や研究ができる環境が必要であり、障害のレベルに関係なく、自立することを自然に教育することが重要です。

同じ学校で数年間過ごせば、クラスの誰かが建築家になった時、車椅子の友達を思い出しながら建物を設計でき、政治家になったら、障害のある友人を念頭において対応策を立案できると思います。教員、公務員、デザイナー等も同様です。

ゆっくりと時間をかけ、ルーズソックスや茶髪の子供たちに期待することが、一番の近道だと考えています。

この講演は、平成11年8月9日、北海道立林産試験場と社団法人北海道林産技術普及協会が主催した第8回木のグランドフェアの期間中に行なった講演会、「高齢者・身障者にやさしい生活を考えよう」の中で行なわれたものです。

小河先生のご好意により、本誌用に投稿をいただきました。